



Bioethics Law and Surrogacy in France

フランスの生命倫理法と代理出産

Interviewee

Dr. Hélène Malmanche

Q. 研究者としてのバックグラウンド、専門領域について教えてください。

人類学者で、社会科学のバックグラウンドを持っている。PhDのための研究では、家族法の専門家であり、同性カップルの代理出産と家族形成について多くの研究があるフランスの著名な社会学者、Irene Thery のところで研究指導を受けた。

アカデミアに入る前は、助産師をしていた。そのとき、非公式に代理出産を実施しているフランス人のカップルを見たことがあった。それがきっかけで臨床における実態に興味を持つようになった。

ベルギーでの代理出産の実態（特に、臨床における実態と法律で許可あるいは禁止されていることとのギャップ）を、代理出産が完全に禁止されているフランスと比較して、博士論文のためのフィールドワークを完成した。ベルギーとフランスのシステムと、代理出産に関連するすべての当事者（代理母、依頼親、エージェント、医療スタッフ、生まれた子供）の間の関係に興味を持っていた。これらの人々がどのように関係しているか、そして代理出産の取り決めの中でどのように関係が組織化されているかを理解しようとした。

同性カップルによる ART の使用（特に精子と卵子の提供）についても研究している。自分がインタビューした依頼親

は、全員が、フランス国内でこれらのテクノロジーにアクセスすることが許可されていないか、アクセスできなかったため、海外に行かなければならなかった。フランスでは配偶子の提供が認められているが、提供者が不足しているため、女性の 90% が海外に行く羽目になる。

フランスの人口統計研究所 (INED) で、国境を越えた生殖技術に関する研究でポストドクを間もなく開始する。フランスで国境を越えた生殖技術を使用している人の数、彼らが何を求めているのか、何を必要としているのかなどを評価することを目的として、研究チームの一員として仕事をする。

博士号の研究に基づいて本の執筆も行なっている。フランス語で書いていて、現在、編集している段階にある。

Q. 論文のもとになった調査について教えてください。難しい点はありませんでしたか。どのように対処しましたか。対象者の代表性について、どのように考えますか？

2020 年の論文の際に行った調査では、フランス人の依頼親とフランス人の代理母へのインタビューを行った。これらの人々にアクセスすることが、相当、難しかった。アメリカの代理出産エージェントに代理母を紹介してくれるよう依頼するのはためらわれた。当初、依頼親を通して代理母にインタビューを依頼しようと考えたが、これはうまくいかなかった。依頼親は、すでに多くのことを代理母に頼んだと感じていた。最終的に、20 組以上のカップルを研究協力者として集めることができた。これらのカップルの構成はさまざまだった。たとえば、ベルギーの病院でフィールドワークを行った時に会った異性愛のカップル（妻は自分で子供を産むことができな



った)、フランスで、同性愛とレズビアン
の親の組織を通じて出会った同性愛の
カップルなど。フランスでは代理出産に
ついて多くの議論があり、その実施につ
いては広く討議されている。ただし、実
際に代理出産に関わるのは、1年に100～
500組未満のカップルだろう（フランスで
は禁止されているので正確な把握は難し
い）。依頼親や代理母は、プロセスの間
は情報を求めているので、1-2年の間は深
く関与する。だからこの間は、研究にも
積極的に参加する傾向があるが、プロセ
スが終わると、そうではなくなる。子供
が少し成長すると、代理出産からは距離
を置く傾向があるため、参加者の多様性
を確保するのが難しい。ベルギーに行く
異性愛のカップルの場合、困難なことは、
サンクションがあるかもしれないとい
うこと。北米に行く人は、そういう問
題はない。カナダとアメリカの法律で
は、親子関係が認められているから。ベ
ルギーではほとんどの場合、フランス人
の代理母に依頼しているため、サンク
ションを受けたり、問題が発生したりす
るリスクがある。研究を行う際、そうした
人たちからの信頼を得るのは非常に難
しかった。代理出産にはさまざまな種類
がある。そのプロセスは国によっても異
なり、依頼親と代理母の間に、既存の
関係があるかどうかなどもまちまち。代
理母と関係を築く場合、以前から知っ
ていた人かそうでないかでは、異なっ
てくる。西欧の文脈では、代理母が依
頼者の生活に統合されるので、それは
「出会い」の物語になる。代理出産の
後、距離を置くが、結びつきは残り、
名付け親や遠い親戚のような関係に
なる。ウクライナ、ギリシャ、インド、
ロシアの代理出産の場合、こうした
関係が形成されないため、かなり異
なる。ウクライナやインドのような
場所で代理出産を依頼する依頼親の
場合、彼らは代理母と将来の赤ちゃんに

ついて考えてはいるものの、代理母と直
接話をするには許されていない。自分
の研究は、関係の形成を伴う代理出産
のタイプを代表するものにすぎない。自
分の研究は、依頼者と代理母がお互い
を知っている場合（親族または知り合
い）の、両者の関係性に焦点を当て、
この文脈でどのような構造が存在する
かを説明している。「非関係の関係
(relation of non-relation)」とい
う概念を用いて分析したスコットラ
ンドの研究者でモニカ・コンラッド
(Monica Conrad)の論文が興味深い。
彼女は、この概念を用いて提供が匿名
で行われたときの卵子提供者とレシ
ピエントの関係性について研究を行
った。

Q. フランスの生命倫理法の改正について教えてください。

フランスでは、1994年以來、代理出
産は完全に禁止されている。フランス
の政治家は、代理出産を、物事を判
断する基準(yardstick)であるか
のようにみなして、それは、決して
認められないものだと考えている。
だから代理出産を合法化するのは、
かなり難しい。代理出産の前で線
を引くことで、それ以外の分野で
の改革が可能になっている。たと
えば、同性カップルがARTにア
クセスできるようになった。代理
出産についてはどうか？そもそも
代理出産は認められていないので、
同性カップルに代理出産が認めら
れることはまずない。彼らは代理
出産を悪いことであるかのごとく
みなしている。これまで、代理出
産についてたくさんの議論がなさ
れているが、法律は変更されない。
しかし、社会はかなり変化してき
ている。仮に100人の対象者がい
るとすると、異性愛のカップルが
代理出産を利用できるという考
えに半数以上の人が賛成する。同
性愛のカップルと独身男性で



は多少異なるが、女性が別の女性のために子供を産むという考えは、ある時期、比較的受け入れられていた。特に大都市では、家族を持つために代理出産を依頼することは完全に受け入れられている。しかし、カトリック教会が政治的な論争に加わっている。宗教は今日の大半の人々の生活の中心ではないため、彼らはもはや過半数を代表していないが、教会は依然としてそのような倫理的議論に対して影響力を持っている。約1年前に生命倫理法案が更新された。その際、夜遅くまで議会に残った議員はごくわずかだったが、改正案は通過した。それは、代理出産が合法の国で生まれた子供は、フランスのシステムで認知されるという内容が含まれていた（その出生証明書はフランスの登録簿に受理されることになっている）。この時、議会には人が少なかったため、この法案はすり抜けることができた。しかし、その後、国会によって拒否された。この改正案の意図は、フランスで代理出産を認めるものではなく、フランス国外で代理出産から生まれた子供が、代理母の子どもではなく、依頼親の子供として認められるようにすることだった。現在、この手続きには高等裁判所で行われていて、結論に至るまで非常に長い時間がかかるだろう。代理出産について有名な事例がある。あるカップルが、卵子ドナーと代理出産を利用し、生まれた子供の出生証明書に自分の名前を入れるために長い間、裁判で争った。最終的に、彼らは勝訴し、彼らの主張は欧州裁判所によって認められた。その後、欧州裁判所は、フランス政府がこれを認めなかったことを批判した。このプロセスには20年近くもかかった。代理出産で生まれた子供が認められる良い先事例になるかもしれないと考えられていたが、結局はそうはならなかった。今の法律では、子供が海外で生まれた場合、子

供が生まれた国の法律よりもフランスの法律の方が優先されると解釈されている。もし、2人の男性が外国の出生証明書に親として記載されている場合（フランスでそれは不可能で、片方の男性は、子どもを養子縁組する必要がある）、それは認められない。フランスの法律では、子供は女性から生まれているという事実を無視することは認められない。フランスでは、子どもが生まれる前に同性の親を認めるための裁判所命令は存在しない。一方で、レズビアンを母親として認める手続きはある。これは養子縁組を必要としない。親になる意志が父性(filiation)の基礎になるという考えを受け入れるなら、これは父性の「脱自然化」への一歩になる。しかし、フランスでは妊娠出産と母親の母性(filiation)の関係は依然として非常に強固。妊娠によって母子関係(filiation)がどのように作られるか、あるいは作られないか、遺伝的関係があることや、その欠如によってどのように変化するかに関心がある。複数の潜在的な構造がある。それに割り当てられた意図と意味が状況を変化させる。したがって、同じ枠組み内で考えられるさまざまな状況を比較することが重要だった。

Q. “donation without a donor” ideology と呼ぶものについて、もう少し詳しく教えてください。

精子提供の匿名性の維持に関係したのは、1970年代(IVFの導入前)からのイデオロギーだった。それは姦淫の恐れと関係があった。自然に妊娠させることができなかった父親がいて、彼らは精子ドナーを必要としていた。しかし社会はまだドナーが何であるかを理解していなかった。それはまったく新しい立場だったので、ドナーと父親の間で対立の恐れが



あった（例えば、ドナーからの親権の主張）。医師が見つけた解決策は、ドナーを完全に「消去」することだった。つまり、ある種の精子バンクを作りたかった。精子は他の生物学的物質と同じように扱われた（つまりそこには人としての男性は存在しなかった）。彼らは提供を非人間化し、献血に匹敵するものにしたかったので、ドナーの ID は関係ないもののように扱われた。そして、精子は医師自身によって提供されたかのように、ほとんどどこからともなく来る贈り物のように扱われた。これは、ドナーの匿名性にクリニックの秘密性を組み合わせて、ドナーと依頼親の間に侵入できないスペースを作り出した。これが 1970 年代の精子提供の仕組みだ。

もちろん、この技術で生まれた子供たちは成長し、父親が実の父親ではないことを発見した。ほとんどの場合、これは偶発的なものだった（たとえば、離婚後や父親の死亡後など）。それ以来、これらの人々の多くは、ドナーに関する情報を主張している。彼らはグループを結成し、非常に活発な政治活動をした結果、ドナー情報へのアクセス権を獲得し、それがシステム全体を変えた。

現在、匿名性は 18 歳までしか保持されない。現在、ドナーのアイデンティティが記録され、これらの記録は政府によって保管されている。依頼親はドナーを選択できないが（たとえば、知っている人を連れてくるなどの形で）、提供によって生まれた子供は 18 歳になるとドナー情報にアクセスできる。子供はドナー情報にアクセスできるが、ドナーは子供の情報にアクセスできない。

Q. フランスでは、伝統的な核家族の考え方は堅固ですか？ 階層や人種/民族によって

異なりますか？ 生殖補助医療の規制は、それに沿ったものだと考えられますか？

核家族は今でもフランスの家族の主流の概念。昔からのカトリックの家族の子孫である非常に保守的な家族にとって、彼らは社会に所属しており、受け入れ可能なモデルは 1 つだけであり（=核家族）、これは 19 世紀（ナポレオン時代）から受け継がれていると固く信じている。ユニークな考え方を持っているということはとてもフランス人らしいこと。それが何であるかは問題ではないが、活発な議論の後に単一の良い解決策に到達するというのが、フランス人の精神を真に満足させるものだ。フランス人は平等について特定の考えを持っているが、それは平等と、同等だ、という考えを幾分混乱させるものだ。フランス人には、平等であるということは、同じものを持つことだという考えがあり、それはベルギーのアプローチとは異なる。ベルギーでは、平等は、隣人とまったく同じものを持っているということではない。例えば、

「人々は異なっているが、人々は多様性がありながらも同じ権利を持っているべき」ということ。これは、平等とは何かについての非常に具体的な見方だ。統一性と素晴らしい解決策に至ることへのフランス人の希求は幾分気取っている。核家族というアイデアは、この平等の見方に関連している（例、「皆が同じであれば、それが平等である」）。多様な家族モデルはフランス人にとって新しいもの。家族に関連する規則や法律は、フランス 社会とフランスのシステムに非常に深く関わっている。それはアイデンティティの深い感情に影響を与え、非常に繊細なもの。核家族はもう機能していないが、今もモデルとして機能している。フランス社会は、多様性と複数の潜在的な家族モデルという考え方に徐々に馴染んできている。下層階級と上流階級は核



家族モデルに愛着があるが、中産階級は複数性をより受け入れている。自分の研究対象はこの状況を反映している。ゲイとレズビアンのカップルと依頼親は、ほとんどの場合、中上流階級に見られる。これは、そのグループの社会人口学的特徴の何がしかを物語っている。

Q. フランスの平均的な家族像にとって、ドナーや代理母の存在は、どのように位置づけられますか？ あくまでも家族の外の存在ですか。ドナーきょうだいはどうなりますか？

自分の研究に参加した依頼者の何人かは、非常に保守的な家族の出身だった。同性愛のカップルの場合、多くのハードルを乗り越えなければならない。第一に、カミングアウトが必要であり、それは困難が伴う。第二に、代理出産によって自分の家族を作るとを親族に伝えなければならない。これは、自分たちが両親とは異なっていること、伝統的な家族ではないことを受け入れ、さらに、家族を作るために境界線を超えてつき進むことを意味する。自分がインタビューした人々のほとんどは、フランスでは代理出産が認められていないことから、最初は否定的な先入観を持っていた。彼らは最初にこれらのアイデアを解体して、代理出産とは何かについて新たに理解し直す必要があった。そうして初めて、彼らは自身の倫理的枠組みに則ってこのプロセスをやり通すことができた。彼らが非常に伝統的なモデルから非伝統的な形に移行するのを目撃するのは興味深かった。

Q. アメリカで実施されている商業モデルと、ベルギーなどヨーロッパで好まれている利他的モデル、どちらがフランス人の代理出産依頼者に好まれますか？

第一に、お金が重要な要素になる。10万ドルで代理出産をする余裕がある人は、選択肢がある。いちばん良い条件のオプションを選択し、それに応じて独自の倫理的枠組みを適用することになる。それに対して、1万ドルしかない場合は、ベルギーに行くことを選択し、自分で代理母を見つける必要がある。金銭的側面とは別に、依頼親の決定に影響する2つの主要な要因があった。それは、1) 倫理的枠組みと、2) 周囲の人たち。自分が出会った人は皆、倫理的な枠組みを念頭に置いていて、道徳的に受け入れ可能な方法で代理出産を依頼したいと考えていた。彼らは代理母の幸福と、親としてどのように振る舞うべきか、あるいは振る舞うべきでないかについて考えていた。これはすべての行動のまさに基礎だった。常に自分たちの行為の道徳性を反省していた。アメリカに行くカップルにとって、しばしば代理母として共和党員ではなく、民主党員の代理母を希望しているということを強く主張していた。彼らにとって、人間性に対する見方は重要だった。ベルギーに行くカップルの場合、一般的に代理母は依頼女性の姉妹、いとこまたは親友などであることが多い。こうした人々との間にはすでにつながりがあるので、信頼関係があるが、代理出産を終えた後、複雑になり、疑いが生じていた。ベルギーでは、100件の代理出産のうち、1/3は開始されることがなく、1/3は完了まで進むが、後の1/3は胚移植の前に中止される。依頼親と代理母の関係は非常に特殊なもので、非常に多くのことが複雑に関係している。それらは、医療



スタッフとのミーティングの前には、あらかじめ予期できなかったことだ。中止の場合、関係者は、この特殊な関係を構築し、それに合わせて心を変えることがいかに難しいかを最終的に理解するようになる。ベルギーでは、人々が代理出産のプロセスを最後まで経験するとき、それは広範な relational work が行われたことを意味し、代理出産の間、医療スタッフはこの関係性の再形成に深く関わっている。ベルギーでの代理出産によって関係性が変化した2人の女性（1人は代理母、もう1人は代理母の姉妹である依頼親）に出会った。代理母には、配偶者との間に3人の子供がいたにもかかわらず、代理出産のために離婚した。代理出産は家族全員に思いがけない影響を与えたが、結局、彼女は姉がとても幸せになったので、何でもないことだと言った。妊娠期間中、代理母と依頼親と胎児は、バラバラの個人ではなく、家族のような存在だと言える。

(2022年3月)

Dr. H el ene Malmanche [Link](#)

助産師としての経験を持つ医療人類学者で、イレーヌ・テリーのもとで指導を受けた。ベルギーや米国で代理出産を依頼するフランス人依頼者や代理母にインタビューを行った。

論文:

Malmanche H. Relational surrogacies excluded from the French bioethics model: a euro-american perspective in the light of Marcel Mauss and Louis Dumont. *Reprod Biomed Soc Online*. 2020 Oct 14;11:24-29